

佐 啓

社会福祉法人 佐 啓 会 ふる里学舎
〒290-0265 市原市今富 1110-1
tel 0436-36-7611
<http://www3.ocn.ne.jp/~fgakusya/>
mail fgakusya@neach.ocn.ne.jp
発行者 里 見 吉 英
編集者 三 股 金 利

複雑な思い

飯田 俊男

地域生活支援事業のコーディネートという職種柄、地域福祉に関する研修会には数多く参加させてもらっている。そこで時々、話題になるのが入所施設否定論。施設はひどい所で日常的に人権侵害が繰り返されている。施設なんていらない。これからは地域福祉を進めるんだという論調。これでもかと思いがたに途中で退席した事もあった。

しかし、コーディネーター事業の登録者の中には、施設の利用を希望している方は多い。コーディネーター制度と、ふる里学舎の入所とは別事業という説明は事前にするものの、実際は日中預かりや短期入所を目的に登録してくる。また、入所を希望している方は、本人の障害の程度も重く確かに家庭での介護には無理があるだろうと率直に言うケースも多い。変な話だが、地域福祉を担う入所施設はまだ必要とされている事を現場で感じさせられた。県内のコーディネーター仲間では、会うたびに短期入所が増えて施設も大変という話になる。ホームヘルパーやガイドヘルパー・ボランティアなどの地域資源を活用させ施設を利用しなくても地域で安心して暮ら

せるように、これが本来の地域福祉の進め方。しかし、そうはきれいにはいかない。

相談の中にはこんなケースもある。ある作業所に通う若い男性。暴力的な所があり、他の利用者から敬遠されてしまう。そんなこんなで周りの保護者からも苦情が出て、作業所での対応は無理なのでふる里学舎で預かってほしいかという話があった。はじめの頃、確かに他の利用者を叩いてしまう事はあったが、時間と共に落ち着きをみせた。なんて事のないひょうきんな人だ。この状態だったら大丈夫だろうと再度作業所に投げかけてみたら、他の保護者の反発が強く受け入れは難しいという。作業所もつらい立場に置かれている事もわかる。作業所の保護者を責めるのもどうか。そこにはシビアな現実がある。

そういえば、ふる里学舎をつくる時に、いくつかの候補地で反対運動にあったという施設長の話しを思い出す。「施設をつくるのはいいが、家の近くにつくられるのは困る。」という総論賛成、各論反対の話だ。しかも社会的にはハイクラスの方たちからの反対だったようだ。しかしこんな社会の現実を、何故だ！と感情的に反発するのはな

く、現実を冷静に受け止めながら施設を運営していかないと、この人たちが本当の意味で守る事は出来ないよと話をしていた施設長の当時の言葉は印象的だった。一番くやしかったらうに。

親亡き後の事を心配し、一生懸命に入所施設の必要性を親が訴え、それに応えて国も施設をつくってきた時代背景がある。それが、ここに来て本当に必要なくなってきたのか。そんな事はないと思う。

介護保険が導入されて、かえって特別養護老人ホームへの入所希望が増えたという。他人を家に上げて、介護してもらうというのは、まだまだ日本ではなじまないようである。介護保険をにらんで、大々的なテレビ広告をして事業展開をしていたあの会社、いまはどうなったのだろう。必ず必要になるだろうと思われ同時期にスタートした成年後見制度。実際には、介護保険に伴う契約の問題でこの制度を利用したというケースは、ほとんどない。いろんな所で思惑と現実とに大きなズレが生じている。

月2回、ふる里学舎のクラブ活動(つり・カラオケ・ボーリングなど)に在宅の登録者にも希望があれば参加してもらっている。意外だったのは、重度の方より、就労しているような軽度の方の参加が多い事だ。中には「たまには俺、ここに泊まろうかな。」真面目にこんな事を言う人もいる。「ここに来る前は施設なんて絶対やだか」と言っ

て入所施設を一步離れてみて本当にそう思う。この事は、入所施設を利用している本人やその家族、そしてこれから希望する方や、施設で働く職員のためにも、何かの機会に訴えたいと思っていた。

先日緊急で女の子が短期入所に入ってきた。家族で何とか頑張ろうとしたが、限界に達したという。大きな声をあげる為、隣近所からの苦情も多い。兄弟も彼女におびえてしまっている。施設に来ておびえていた最初は大きな声をだしていた。当日の宿直は新人職員なので心配だったが、翌朝、話を聞くと、「一緒にいてあげると落ち着いています。宿直室の職員のベツトで寝させてあげると、安心してののか、ぐっすり寝ていました。」とケロツとしている。本当は大変だったろうに。一年もたたないのに随分と成長したなと思う。文句一つ口にはせず、プロ意識を持って業務にあたった彼女には彼女なりの立派なプライドを感じた。しかし、こんな職員、入所施設にはたくさんいる。

いたのに：こんなに変わるなんて。「母親がうれしそうに話してくれたのが印象的だった。」

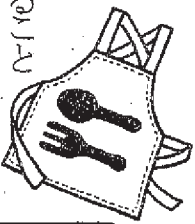
現在、日本は知的障害児者の約三十%・十二万人が入所施設を利用している。その中には、グループホームや生活ホームに移行できる人もいる。また、家庭に入所施設しかなかった時代から、脱却する意味でも大いに今後、整備する必要があるだろう。

しかし、本人や家族が望むなら入所施設ももっと気軽に利用できるシステムにして欲しい。グループホームもよし、入所施設を利用するもよし、家族と暮らすもよし。利用者の選択肢に堂々と入所施設を掲げるべき。それで結果的に入所施設を希望する人がなくなるのであればそれは、それで良い事だと思う。

(地域サービス係長)



僕にできること



宮井 章吾

今年の夏休み、僕は、国語の課題作文で、人権に関する作文を書きました。作文は、母のすすめもあって、兄のこを寄りました。僕の兄がどんな障害をもっているのか、障害をもったひとに対してどんなふうに関係してほしいのかという内容です。

生まれた時から、障害をもっている兄は、自分が何をやってかよくわからなかったりしてはいけなくて、いいことの区別がつかなくなったりします。その他にも困ったことがいっぱいあります。ですから外に出て、人に嫌われてしまう、仕事もない、社会に出られないなどの悲しいことが重なります。

今は養護学校に通っていますが、卒業したら、障害者のための施設に入って不自由な中で生活することになります。自分は何もわからず悪気もなくやっているのだから、人目で見たりしたらかわいそうです。もっと障害者に優しい社会になってほしいのです。と書きました。

するとその作文を読んだ先生が、僕に「お兄ちゃんのために、章吾は何が出来るの?」

僕は「キツとしました。僕にできること」とかかれて、どう答えていいかわからなかったからです。

僕は、兄にやさしくしているし、兄は障害をもっているんだから、しょうがないんじゃないか。そのことを他の人にわかってもらえはいいなと思っていました。

でも、先生は「章吾も社会の中のひとりだよ。お兄ちゃんのためにどうしたらいいか考えてみてよ。」と言ったのです。

家で、兄に優しくするだけじゃだめなのかな? 障害者のことをわかってほしいと言っただけじゃだめかな? 兄のために僕にできることなんて他に何があるのかな。僕は考えこんでしまいました。

でも、僕はその答えを家に帰って見つめました。

家で、兄の面倒を一番みているのは母です。母は兄にとても優しくしています。外でも家でもいつも忙しく働いている母ですが、兄と接するときは必ず仕事の手を止めて、兄のためにゆっくり時間を使うようにしています。もっとゆっくり母が兄との時間がもてれば…。そのためにどうしたらいいか考えました。

僕が母の手伝いをすればいいのです。そういえば父もよく家事の手助けをしています。食事のあととかたづけは、だいたい父がやってくれます。

そうか。僕にできることは、こういうことなんだ。父も母も自分達のできることを精いっぱい兄のため、家族のためにやっている。そんなふうに自分のできることからやってみようかと兄に話して、障害者にとって優しい社会をつくることになった。

そう思ったならんだか気持ち明るくなってきました。学校でも僕にできることをしていけばいいのです。これからは、友達が困っていたら手を貸したいと思えます。僕で役に立つことがあったら進んで活動していきます。それが兄のためになるのです。

僕の願いは、兄のように障害をもった人

も健康な人も共に生きていける優しい社会です。そんな社会のために僕は僕のできることを精一杯していきたいと思っています。

(宮井 章吾 第 中学一年)

第四十六回市原市中学生意見発表会より



アイデンティティ

松橋 達也

香港国際空港行き機中。周囲には一攫千金「マカオドリーム」を夢見て目が爛々と輝く同僚達。そして、広東料理、飲茶に思いをはせる女性職員。飛行機が自由に空を飛び回るのが当たり前であった今年七月のことである。

五年に一度の海外への職員旅行。前回はグアムの青い海・白い砂浜で「なまこ」と戯れた。今回は香港・マカオ組と北京組の2組に分かれ、その先陣を切つての出発である。(ちなみに北京組は十一月実施予定であったが、ユニバーサルスタジオジャパン及び京都方面に変更され実施された。)

同僚達の弾む会話を聞きながら、ひとり目を閉じる私。今、自分がこの場にいる喜びを噛みしめつつ、なぜか十年前のことを思い出していた。

当時私は十九歳。自分自身の未熟さのために親や兄弟をはじめ、周囲の人たちを傷つけた。そして自分は間違ってたのかなと自分自身を正当化し、突っ走った。周囲の人のことなど頭に全くなかった。

「住所不定、無職」当時の私の存在を示す言葉だ。大学を中退し、その日暮らしをしていた私は、ふと気づくと渋谷や新宿アメ横などの雑踏に身を置いていた。当時一番居心地が良い場所であり、唯一自分の存在を確認できる場所でもあった気がする。今にして思えば現実逃避をしていたに過ぎなかったのかもしれない。

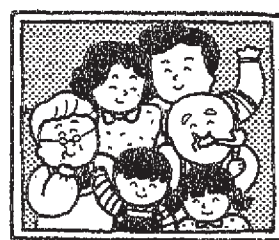
つい前置きが長くなってしまった。それから十年。私自身も、そして世界も大きく変化した。そんな中、香港の雑踏に身を置き自分自身の存在を確認したいという衝動に駆られてしまった。

初日はマカオ観光後、地元中華料理屋で大宴会。青島ビールは意外にも美味かった。そして出発前のお目当てであったカジノ。一攫千金を夢見ていたのになぜか冷静な自分がある。いや、自分だけではない。同僚達も同じであった。ほとんどのカジノを切り上げ部屋でワインを楽しむ。二日は香港の夜景をバックに、フランス料理とワインをご馳走になる。なんという贅沢だろう。

最終日。私はひとり香港の雑踏に身を置いていた。行き交う人々を眺めつつ、今回の旅のこと、この十年間のこと、そしてこれから自分が頭の中を駆け巡る。住所不定・無職であった私も、住む家を持ち、家族がいる。そして自分自身が誇れる仕事とその想いを共有できる仲間がいる。当時は自分のことで精一杯であったため

行き交う人々を視野に入れる余裕がなかった。そこには目の輝いている人、元気がない人、様々な人が存在していた。しかし、あれほど居心地よく感じた雑踏はそこにはなかった。

十年前の自分とは明らかに違う自分を確認したことを土産に帰路につく。今度は五年後どこでどんな自分を発見しようか。



(指導員)

編集後記

職員旅行のために、バスポートを作り北京を心待ちにしていたが、テロの関係で国内旅行へ。しかし、紅葉・ストリーズの京都もまた、すばらしくてなものであった。二十一世紀最初の年もあと一ヶ月。

あまりいい出来事があった中、最後に、ロイヤルベビー誕生のうれしいニュース。さて、私にとつての一年は…。

佑啓四十三号をお届けします。

(星 ワカミ)

